

金井和貴

レムニスケートの等分点による 非可換拡大の構成

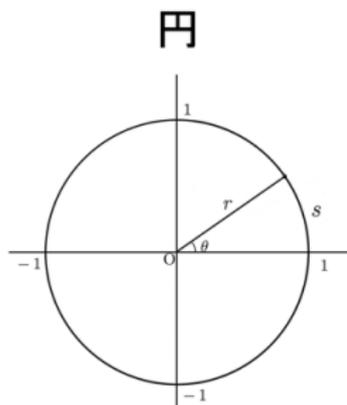
金井和貴

自然科学研究科数理物質科学専攻
星研究室 博士前期課程2年

2017年2月9日

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β
2. 類体論と最大 Abel 拡大
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大
4. 主結果と今後の課題

金井和貴



$$r = \cos \theta$$

$$\pi := 2 \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1-t^2}} dt$$

$$\approx 3.14159$$

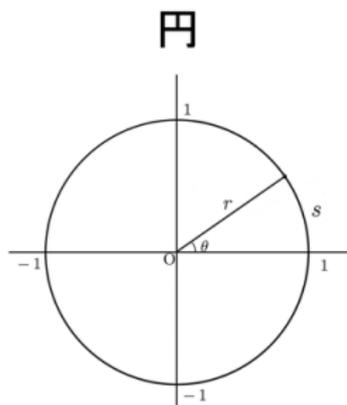
1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

金井和貴



$$r = \cos \theta$$

$$\pi := 2 \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1-t^2}} dt$$

$$\approx 3.14159$$

$$\varpi := 2 \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1-t^4}} dt$$

$$\approx 2.62206$$

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

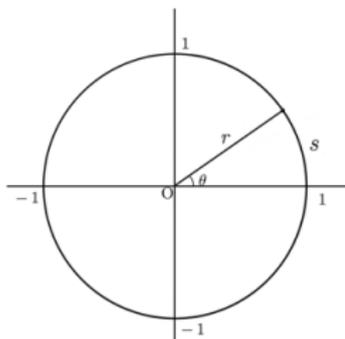
2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

金井和貴

円

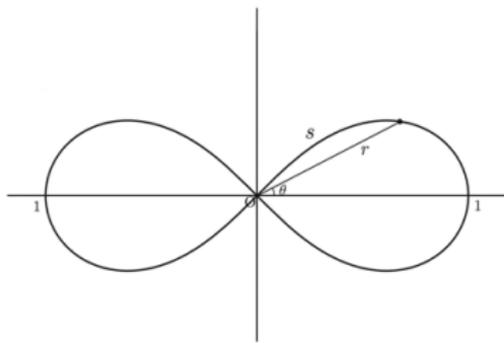


$$r = \cos \theta$$

$$\pi := 2 \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1-t^2}} dt$$

$$\approx 3.14159$$

レムニスケート



$$r^2 = \cos(2\theta)$$

$$\varpi := 2 \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1-t^4}} dt$$

$$\approx 2.62206$$

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

金井和貴

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β
2. 類体論と最大 Abel 拡大
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大
4. 主結果と今後の課題

cf. D. A. Cox and T. Hyde, *The Galois theory for the lemniscates*, J. Number Theory **135** (2014), 43–59.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β
2. 類体論と最大 Abel 拡大
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大
4. 主結果と今後の課題

§1 レムニスケート \sin 関数

第 1 象限において, レムニスケートの弧長 s は

$$s = \int_0^{r_0} \frac{1}{\sqrt{1-r^4}} dr \quad (1)$$

により与えられる. ここで,

$$\varpi := 2 \int_0^1 \frac{1}{\sqrt{1-r^4}} dr \approx 2.62206 \text{ (超越数)}$$

と置けば, 周は 2ϖ , n 等分点間の長さは $2\varpi/n$ となる.

(1) の逆関数を **レムニスケート \sin 関数** と呼び, $\operatorname{sn}(\theta)$ と書く.

命題 1.1

$u, v \in \mathbb{R}$ に対して次が成立する.

$$(1) \operatorname{sn}'(u) = \sqrt{1 - \operatorname{sn}^4(u)}, \operatorname{sn}''(u) = -2\operatorname{sn}^3(u).$$

$$(2) \operatorname{sn}(u \pm v) = \frac{\operatorname{sn}(u)\operatorname{sn}'(v) \pm \operatorname{sn}'(u)\operatorname{sn}(v)}{1 + \operatorname{sn}^2(u)\operatorname{sn}^2(v)} \text{ (加法定理)}.$$

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

複素レムニスケート sn 関数と虚数乗法

レムニスケートの等分点と非可換拡大

金井和貴

定義 1.2 (複素レムニスケート関数)

$z = x + iy \in \mathbb{C}$ に対して,

$$\operatorname{sn}(z) := \frac{\operatorname{sn}(x)\operatorname{sn}'(y) + i \operatorname{sn}'(x)\operatorname{sn}(y)}{1 - \operatorname{sn}^2(x)\operatorname{sn}^2(y)}$$

とする. これを**複素レムニスケート sn 関数**と呼ぶ

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

定理 1.3

- (1) $\operatorname{sn}(z)$ は \mathbb{C} 上の有理型関数である.
- (2) $\operatorname{sn}(z)$ の零点は $(m + in)\varpi$, 極は $(\frac{m}{2} + i\frac{n}{2})\varpi$ であり, 位数は全て 1 である.
- (3) $\operatorname{sn}(z)$ は $2\varpi\mathbb{Z} + 2\varpi i\mathbb{Z}$ を周期に持つ.

定理 1.4

$\beta \in \mathbb{Z}[i]$ に対して, 互いに素な $P_\beta(X), Q_\beta(X) \in \mathbb{Z}[i][X]$ で

$$\operatorname{sn}(\beta z) = \operatorname{sn}(z) \frac{P_\beta(\operatorname{sn}^4(z))}{Q_\beta(\operatorname{sn}^4(z))}.$$

を満たすものが帰納的に構成できる.

K_β の $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ 上の最小多項式

$k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$, $\mathcal{O}_k = \mathbb{Z}[\sqrt{-1}]$, $K_\beta = k(\text{sn}(2\varpi/\beta))$ とする.

定義 1.5

奇数 $\beta = x + iy \in \mathcal{O}_k$ ($\stackrel{\text{def}}{\iff} x + y$ が奇数) に対して,

$$\Lambda_\beta(X) = \prod_{[\alpha] \in (\mathcal{O}_k / \beta \mathcal{O}_k)^\times} (X - \text{sn}(\alpha(2\varpi/\beta)))$$

を β^{th} -lemnatomic polynomial と呼ぶ.

命題 1.6

奇数 $\beta \in \mathcal{O}_k$ に対して

$$XP_\beta(X^4) = \prod_{\gamma | \beta, \gamma \equiv 1 \pmod{2(1+i)}} \Lambda_\gamma(X).$$

定理 1.7 (Eisenstein 1850, Cox-Hyde 2014)

奇数 $\beta \in \mathcal{O}_k$ に対して, $\Lambda_\beta(X)$ は k 上既約である.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

K_β の $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ 上の Galois 群

定理 1.8 (Rosen 1981, Cox-Hyde 2014)

奇数 $\beta \in \mathcal{O}_k$ に対して,

$$\mathrm{Gal}(K_\beta/k) \simeq (\mathcal{O}_k/\beta\mathcal{O}_k)^\times$$

が成立する.

上の同型は $\alpha \in (\mathcal{O}_k/\beta\mathcal{O}_k)^\times$ に対して, K_β の k 自己同型 $\sigma : \mathrm{sn}(2\varpi/\beta) \mapsto \mathrm{sn}(\alpha(2\varpi/\beta))$ を対応させることにより得られる.

系 1.8

奇数かつ素元な $\beta \in \mathcal{O}_k$ に対して, $N_{k/\mathbb{Q}}\beta = m$ とすると

$$\mathrm{Gal}(K_\beta/k) \simeq C_{m-1} \text{ (巡回群)}$$

が成立する.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

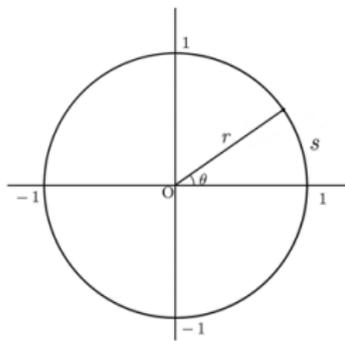
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

円とレムニスケート

金井和貴

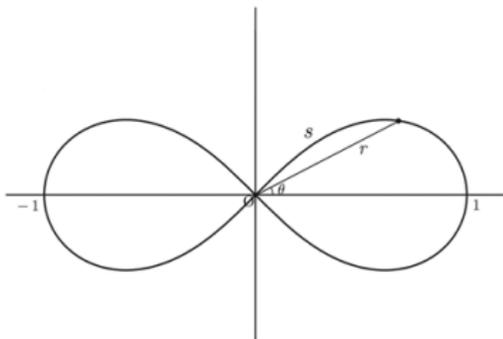
円



$$r = \cos \theta$$

$$\underline{\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q}) \simeq (\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^\times}$$

レムニスケート



$$r^2 = \cos(2\theta)$$

$$\underline{\text{Gal}(K_\beta/k) \simeq (\mathcal{O}_k/\beta\mathcal{O}_k)^\times}$$

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β
2. 類体論と最大 Abel 拡大
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大
4. 主結果と今後の課題

§2 イdeal類群

この節では, $\mathbb{Q} \subset k$ を代数体, \mathcal{O}_k を k の整数環 (k 中の代数的整数全体のなす環) とする.

定義 2.1 (イdeal類群)

\mathcal{O}_k のイdeal全体を I_k , \mathcal{O}_k の単項イdeal全体を P_k とする. このとき,

$$H_k = I_k / P_k$$

を k のイdeal類群と呼ぶ. $\#H_k = h_k$ を k の類数と呼ぶ.

H_k は有限 Abel 群である. また, $h_k = 1 \Leftrightarrow \mathcal{O}_k$ は PID.

$$\begin{array}{ccccccc}
 1 & \longrightarrow & \text{Ker } \varphi & \longrightarrow & k & \xrightarrow{\varphi} & I_k & \longrightarrow & \text{Coker } \varphi & \longrightarrow & 1 \\
 & & \parallel & & \cup & & \cup & & \parallel & & \\
 & & \mathcal{O}_k^\times & & a & \longmapsto & (a) & & H_k & &
 \end{array}$$

H_k は \mathcal{O}_k^\times と共に “数とイdealのずれ” を表している

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

Hilbert 類体と射類体

定義 2.2 (Hilbert 類体, Hilbert, 1897)

K/k を代数体の拡大, \mathfrak{p} を k の 1 次の素イデアルとするとき

$$\mathfrak{p} \text{ が } K/k \text{ において完全分解} \iff \mathfrak{p} \in P_k$$

が成立する体 K を k の Hilbert 類体と呼ぶ.

定理 2.3 (Hilbert, 1899)

k の Hilbert 類体 K に対して, $\text{Gal}(K/k) \simeq H_k$.

例. Hilbert 類体

- ▶ $k = \mathbb{Q} : h_k = 1, K = \mathbb{Q}$
- ▶ $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1}) : h_k = 1, K = k$
- ▶ $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-5}) : h_k = 2, K = k(\sqrt{-1}) = \mathbb{Q}(\sqrt{-5}, \sqrt{-1})$

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

金井和貴

定義 2.2 (Hilbert 類体, Hilbert, 1897)

K/k を代数体の拡大, \mathfrak{p} を k の 1 次の素イデアルとするとき

$$\mathfrak{p} \text{ が } K/k \text{ において完全分解} \iff \mathfrak{p} \in P_k$$

が成立する体 K を k の Hilbert 類体と呼ぶ.

イデアル類群のモジュラス m ごとの精密化を考える.

定義 2.4 (射類体, 高木貞治, 1920)

K/k を代数体の拡大, \mathfrak{p} をモジュラス m と互いに素な k の 1 次の素イデアルとするとき

$$\mathfrak{p} \text{ が } K/k \text{ において完全分解} \iff \mathfrak{p} \in P_k(\mathfrak{m})$$

が成立する体 K を m に対する射類体と呼ぶ.

\mathfrak{m} は \mathcal{O}_k のイデアルであり, $\mathfrak{m} = \mathcal{O}_k$ のとき, $P_k(\mathfrak{m}) = P_k$.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

定理 2.5 (高木貞治, 1920)

k のモジュラス m に対して, 射類体 L_m が一意に存在して,
$$\text{Gal}(L_m/k) \simeq H_k(m).$$

例 射類体としての円分体 ($k = \mathbb{Q}, m = (n)$ の場合)

円分体 $\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q}$ と \mathbb{Q} の単項イデアル $\mathfrak{m} = (n)$ に対して,

$$I_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m}) = \{a \in \mathbb{Q} \mid a > 0, (a, n) = 1\},$$

$$P_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m}) = \{a \in I_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m}) \mid a \equiv 1 \pmod{n}\},$$

$H_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m}) = I_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m})/P_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m})$ となる. ここで

$$\Phi : I_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m}) \ni a \mapsto \bar{a} \in (\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^{\times}$$

Φ は全射であり, $\text{Ker } \Phi = P_{\mathbb{Q}}(\mathfrak{m})$ となる. したがって,

$$\text{Gal}(\mathbb{Q}(\zeta_n)/\mathbb{Q}) \simeq (\mathbb{Z}/n\mathbb{Z})^{\times} \simeq H_{\mathbb{Q}}(n)$$

であり, $\mathbb{Q}(\zeta_n)$ は \mathbb{Q} の (n) に対する射類体である.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_{β}

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

Kronecker-Weber の定理と \mathbb{Q} の最大 Abel 拡大

レムニスケートの等分点と非可換拡大

金井和貴

定理 2.6 (高木貞治, 1920)

$\forall K: k$ の Abel 拡大, $\exists m$: モジュラス s.t. $K \subset L_m$: m の射類体.

\mathbb{Q} の場合はより具体的に次のようになる.

定理 2.7 (Kronecker-Weber の定理, 1896)

$\forall K: \mathbb{Q}$ の Abel 拡大, $\exists n \in \mathbb{N}$ s.t. $K \subset \mathbb{Q}(\zeta_n)$.

これにより, \mathbb{Q} の最大 Abel 拡大 \mathbb{Q}^{ab} は

$$\mathbb{Q}^{ab} = \mathbb{Q}(\zeta_n \mid n \in \mathbb{N}).$$

問題 (Hilbert の第 12 問題, 1900)

$\zeta_n \in \mathbb{Q}^{ab}$ の対応物を k^{ab} において見つけよ.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

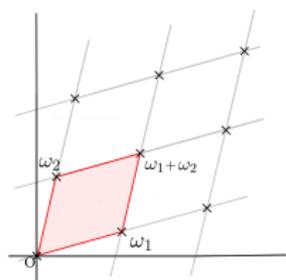
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

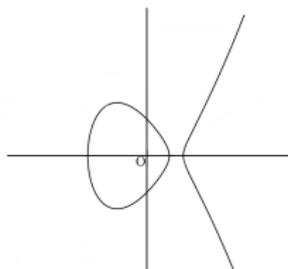
§3 複素トーラスと楕円曲線 ($k = \mathbb{Q}(\sqrt{-m})$)

レムニスケートの等分点と非可換拡大

金井和貴



$$f : z \mapsto (\wp(z, \mathbf{a}), \wp'(z, \mathbf{a}), 1)$$



$$\mathbb{C}/\mathbf{a}, \mathbf{a} = \omega_1\mathbb{Z} + \omega_2\mathbb{Z} \\ (\omega_1, \omega_2 \in \mathbb{C})$$

$$E : y^2 = 4x^3 + \gamma_2x + \gamma_3 \\ (\gamma_2, \gamma_3 \in \mathbb{C})$$

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

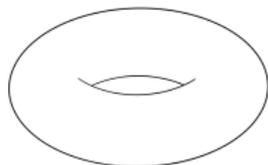
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

定義 3.1 (j 不変量)

$$j(E) := 1728 \frac{\gamma_2^3}{\gamma_2^3 - 27\gamma_3^2}$$

境界を同一視



定理 3.2

以下は同値.

- (1) $j(\mathbf{a}_1) = j(\mathbf{a}_2)$.
- (2) $\mathbb{C}/\mathbf{a}_1 \simeq \mathbb{C}/\mathbf{a}_2$.
- (3) $E_{\mathbf{a}_1} \simeq E_{\mathbf{a}_2}$.

$k = \mathbb{Q}(\sqrt{-m})$ の Hilbert 類体

定理 3.1

$C_i \in H_k$ ($1 \leq i \leq h_k$) (イデアル類群) とする.

- (1) j 不変量は各類 C_i に対する不変量である.
- (2) $j(C_i)$ は代数的整数であり, 互いに k 上共役となる.

定理 3.2

$k(j(C_i))$ ($1 \leq \forall i \leq h_k$) は k の Hilbert 類体である.

例. $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-5})$ の j 不変量 ($h_k = 2$)

$H_k = \{C_1 = (1), C_2\}$ とする. このとき,

$$j(C_1) = 2^3 5 (25 + 13\sqrt{5})^3, \quad j(C_2) = 2^3 5 (25 - 13\sqrt{5})^3$$

より, k の Hilbert 類体は $k(\sqrt{5}) = \mathbb{Q}(\sqrt{-5}, \sqrt{5})$.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

$k = \mathbb{Q}(\sqrt{-m})$ の射類体

定義 3.3 (E の \mathfrak{a} 等分点の成す群)

k に対応する楕円曲線 E , \mathcal{O}_k のイデアル \mathfrak{a} に対して

$E[\mathfrak{a}] = \{P \in E(\mathbb{C}) \mid \text{任意の } \alpha \in \mathfrak{a} \text{ に対して } [\alpha]P = O\}$
 を E の \mathfrak{a} 等分点の成す群 と呼ぶ.

定理 3.4 (高木貞治, 1920)

$k(j(C_i), x(E[\mathfrak{a}]))$ は k の \mathfrak{a} に対する射類体である.
 ただし, $P = (x, y) \in E[\mathfrak{a}]$ に対して

$$x(P) = \begin{cases} x & (j(E) \neq 0, 1728) \\ x^2 & (j(E) = 1728) \\ x^3 & (j(E) = 0) \end{cases}$$

定理 3.5

$k(j(C_i), E[\mathfrak{a}])$ は $k(j(C_i))$ 上の Abel 拡大である.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

$k = \mathbb{Q}(\sqrt{-m})$ の射類体例 $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$, $\mathfrak{a} = (3)$ の射類体

k に対応する楕円曲線は $E: y^2 = x^3 + x$ であり, $E[3]$ は

$$\left\{ O, (\alpha, \pm\beta), (-\alpha, \pm i\beta), \left(\frac{1}{\sqrt{3}\alpha}, \frac{\pm 2}{\sqrt[4]{27}\beta} \right), \left(\frac{-1}{\sqrt{3}\alpha}, \frac{\pm 2i}{\sqrt[4]{27}\beta} \right) \right\}$$

の 9 つの元となる. $(\alpha = \sqrt{(2\sqrt{3}-3)/3}, \beta = \sqrt{2\alpha/\sqrt{3}})$.

$j(E) = 1728$ より, $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$, $\mathfrak{a} = (3)$ の射類体は

$$\underline{k(j(E), x(E[3])) = k(x(E[3])) = k(\sqrt{3})}$$

である. また,

$$k(j(E), E[3]) = k(E[3]) = k(\beta)$$

となる. ここで $k(\beta)$ は

$$\text{Gal}(k(\beta)/k) \simeq C_8$$

より, k 上 Abel 拡大であるが,

$$\underline{\text{Gal}(k(\beta)/\mathbb{Q}) \simeq QD_8 = \langle \sigma, \tau \mid \sigma^8 = \tau^2 = 1, \tau^{-1}\sigma\tau = \sigma^3 \rangle}$$

より, **\mathbb{Q} 上非 Abel 拡大** となる.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

$k = \mathbb{Q}(\sqrt{-m})$ の最大 Abel 拡大

定理 3.6 (高木貞治, 1920)

 $\forall K: k$ の Abel 拡大,

$$\exists \mathfrak{a} \in \mathcal{O}_k \text{ のイデアル s.t. } K \subset k(j(C_i), x(E[\mathfrak{a}])).$$

これにより, k の最大 Abel 拡大 k^{ab} は

$$k^{ab} = k(j(C_i), x(E[\mathfrak{a}]) \mid \mathfrak{a} \in \mathcal{O}_k).$$

ここで $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ など類数が 1 であるとき,

$$\begin{aligned} k^{ab} &= k(j(C_i), x(E[\mathfrak{a}]) \mid \mathfrak{a} \in \mathcal{O}_k) \\ &= k(j(C_i), E[\mathfrak{a}] \mid \mathfrak{a} \in \mathcal{O}_k) \\ &= k(E[\mathfrak{a}] \mid \mathfrak{a} \in \mathcal{O}_k) \end{aligned}$$

が成立する.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

定理 3.7 (Rosen, 1981)

$k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ とする. 奇数 $\beta \in \mathcal{O}_k$ に対して,

$$K_\beta = k(\operatorname{sn}(2\varpi/\beta)) = k(E[\beta])$$

が成立する.

$j(C_i) = 1728$ より,

$$\begin{aligned} k^{ab} &= k(j(C_i), E[\beta] \mid \beta \in \mathcal{O}_k) \\ &= k(\operatorname{sn}(2\varpi/\beta) \mid \beta \in \mathcal{O}_k) \end{aligned}$$

となる. ここから, \mathbb{Q} の最大 Abel 拡大

$$\mathbb{Q}^{ab} = \mathbb{Q}(\zeta_n \mid n \in \mathbb{N})$$

との類似がわかる.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

p が奇素数のとき, $K_p = k(\text{sn}(2\varpi/p))$ の $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-1})$ 上最小多項式が \mathbb{Q} 上定義される.

定理 4.1

$p \equiv 1 \pmod{4}$ のとき

$$\text{Gal}(K_p/\mathbb{Q}) \simeq C_{p-1} \wr C_2 (\simeq (C_{p-1} \times C_{p-1}) \rtimes C_2)$$

$p \equiv 3 \pmod{4}$ のとき

$$\begin{aligned} \text{Gal}(K_p/\mathbb{Q}) &\simeq \langle \sigma, \tau \mid \sigma^{p^2-1} = \tau^2 = 1, \tau^{-1}\sigma\tau = \sigma^p \rangle \\ &(\simeq C_{p^2-1} \rtimes C_2) \end{aligned}$$

となり, 特に K_p/\mathbb{Q} は非可換拡大である. ただし, C_2 による作用は複素共役によるものとする.

1. レムニスケートの等分点による拡大体 K_β

2. 類体論と最大 Abel 拡大

3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大

4. 主結果と今後の課題

金井和貴

- ▶ K_p の部分体の決定
- ▶ K_p の類数問題と岩澤理論の関係
- ▶ 楕円曲線の等分体への応用
- ▶ 円分体との類似の追求

1. レムニスケートの等分点による拡大 K_β
2. 類体論と最大 Abel 拡大
3. 虚 2 次体 k の最大 Abel 拡大
4. 主結果と今後の課題